

桐蔭高校、もう一つの歴史

—和歌山高等女学校の歴史をさぐる—

橋本紗知

はじめに

私の母校、和歌山県立桐蔭高等学校は創立 143 周年の高校である。スローガンは「改革と伝統」。高校在学時も校長先生や様々な先生が「伝統的な高校」である、とことあるごとに話し、廊下には年表が貼られ、旧図書館である同窓会館には桐蔭高校の前身である旧制和歌山中学校の写真や記念品が展示されている。

ところで有吉佐和子氏の小説『紀ノ川』には「和歌山高等女学校」が何度も登場する。この学校が今でいうどの学校の前身なのかと思い調べたところ「現和歌山県立桐蔭高等学校」と書いてあった。つまり桐蔭高校の前身は和歌山高等女学校でもあり、戦後の学制改革によって、男子校であった和歌山中学校と共に桐蔭高校として生まれ変わったのだ。しかし筆者が桐蔭高校在学中、和歌山高等女学校（以下和高女）の歴史について学校で語られたことはなかった。名門女学校であったにもかかわらず共学後、和歌山中学校の歴史だけが残り和高女の歴史は語り継がれなくなっているのだ。本論文では和高女の歴史について筆者が調べたことをまとめていく。

先行研究には土田陽子が『公立高等女学校に見るジェンダー秩序と階層構造』において地方都市の名門女学校の典型例として和高女をとりあげ、地方の近代化とその地域の高等女学校をめぐる表象・実態の関係を考察している。本稿は、土田を参照しながら、『和歌山県教育史』、『高校風土記』ほかの文献を参考に、筆者が行った卒業生へのインタビューなどを加えつつ和高女の歴史をわかりやすくだとりなおしてみたい。

本文第一章は、桐蔭高校 HP の「和中・桐蔭の歴史 明治編、大正～昭和〔戦前〕編」を参考にし、和歌山中学校の歴史と対比させる形で和高女

の歴史をまとめた。第二章では和高女の歴史が現桐蔭高校に伝承されていない理由について日本の共学化の方針、共学化当時の新聞記事や卒業生へのインタビュー、から考察していく。

第一章 和高女の歴史

M21.11	和歌山高等小学校女子学部内に修業年限 2 カ年の温習科が附設される。これが和歌山県立高等女学校の前身である。
M24.3	和歌山高等小学校女子部附設温習科が独立し、市立和歌山高等女学校と称し、創立される後、七番町旧渡辺邸に移転し同邸内にあった裁縫学校を附設とする。全国で第 6 番目の創立。
M25	修業年限 3 年になる
M3 2.4	生徒は袴を着用することになる。
M34.4.1	県立に移管され和歌山県立高等女学校と改称される。
M36.2.9	和歌山市湊通り北 1 丁目に新校舎竣成し移転式をあげる。(現県民文化会館裏)
M36.5	生徒用の袴に 2 条の白線を入れ和高女生徒の章とする
M37.12.23	校歌制定
T10.3.11	修業年限を延長して 5 カ年となる。
T14. 9.11	大正天皇御大婚 5 年奉祝記念として新校旗を制定
T15.10.1	セーラー型生徒制服をきめ着用させる
S2.10.15	講堂落成式。ショルツを招いてピアノ演奏が行われる
S11	軟式野球部発足 (15 年に中止命令)
S16.11.7	創立 50 周年記念式典を挙行する
S16	有吉佐和子が疎開時に和高女に通う
S23	昭和 23 年卒業生を最後として学制改革のため県立高等女学校を閉校

(『桜映会々員名簿』、『いしずゑ』、『和歌山県教育史』より作成!)

沿革

上の年表にあるように県立和歌山高等女学校は和歌山高等小学校に附設の温習科として明治 21 年に設置された。その後明治 24 年に和歌山市立高等女学校となり、和歌山県における最初の正式な女子中等教育機関となる。ちなみに全国で六番目にできた女学校である。しかし、この年の生徒



和歌山高等女学校正門

総数は27名²。男子校である和歌山中学校の開設時の人数が126名³であったのに対し、ずいぶんと少ない人数である。また、男子では「中学校」に相当する女子中等教育機関の名前が「高等女学校」であったことから男子と比べて女子に求める

教育の水準が低かったことを読み取ることができる。

明治34年に県立移管して県立和歌山高等女学校となる。温習科時代は和歌山高等小学校女子部内に付設、市立和高女時代は旧渡辺邸に移転していたが明治36年に和歌山市湊通1丁目に新校舎を竣成し、昭和20年和歌山大空襲で焼失するまでこの地で教育が行われることとなる。



現在跡地は公園になっており、石碑が建っている(写真左上)。和歌山県庁の正面に位置していた。卒業生の記念写真に和歌山県庁舎が写っている(写真右)ことから位置関係を理解できる。左下の写真は現在の当時と変わらない和歌山県庁舎。昭和13年竣工の建築で2013年、国登録有形文化財（建造物）に登録された。

制服の変遷

学校のシンボルともいえる制服の変遷を紹介する。

和歌山高等女学校では明治31年4月より木綿の着物と袴の着用が義務付けられ、明治36年に袴のすそに2本の白線を入れたえび茶の袴が和高女生の袴として定められた。⁴また、「式典日や修学旅行、運動会にも木綿生地、黒紋付の礼服着用を義務付けた」⁵。『学校制服の文化史』によると高等女学校における袴の着用は明治32年に女子高等師範学校附属高等女学校が運動の奨励を目的に規定した⁶。それまでは袴は華族のシンボルとされていたが、運動に便利な袴の着用が附属高女で規定されると、たちまち全国の高等女学校に袴着用の風潮が広まっていった。和高女もいち早くその流れに乗ったということが読み取れる。

また着物は式典の際は木綿の黒紋付と定められ、それ以外の規定について見つけることはできなかったが、全国の高等女学校では「袴が普及し、全国に女子生徒のスタイルが広がっていく一方で、学校は服装の華美を注意し、特に着物については、地質を木綿に制限し、袖を長さに制限を加えるところが多くみられた。」「なかでも矢絣文様の着物は、掛軸IVや『魔風恋風』のヒロインの登場シーンにも描かれ、当時よく着用された柄・文様の一つであったと考えられる」⁷とあることから和高女もその風潮を踏襲していたと考えることが妥当であろう。実際映画『紀ノ川』では和歌山高等女学校に通う主人公文緒やその学友たちは二本の白線が入ったえび茶袴を着用し着物の柄は人それぞれであったことからよく分かる。



大正期の写真。このころはまだ袴の制服であることが見て取れる。

高島雅明ほか『目で見える和歌山市の100年』1994、郷土出版社 p.67より

大正 15 年、セーラー型制服が採用される。スカートのすそには袴時代のデザインを踏襲し、二本の白線が縫い付けられていた。（『和歌山県教育史』）また、髪型も指定されるようになり、「一年生と二年生はおかっぱ頭、三年生と四年生はお下げ髪、五年生になると髷のように一つにまとめて結い上げたそうである」⁸

日中戦争が激化していった昭和 16 年 11 月 7 日、和高女創立 50 周年の記念日にスカートの白線をはずす。昭和 17 年 10 月にはスカートが廃止され、もんぺ通学となり昭和 18 年にはセーラー服から標準服となるなど、戦争の激化に合わせて和高女生の制服は変化を余儀なくされたそうだが⁹。



セーラー服の和高女制服
（卒業生 A さん遺族所有のアルバムより）

特徴的な授業

この時代の女学校といえば裁縫など良妻賢母教育が主であった。和高女では薙刀や箏曲の授業が有名で、「質実剛健」を教育目標としていた。特に薙刀の授業は戦争に向けて薙刀の授業がカリキュラム化される以前に、体力・気力共に養うことを目的として早くから取り入れてきたことなどから度々各メディアにも取り上げられた。

他にも和高女の「質実剛健」さを取り入れたカリキュラムが多く見られ、「五里マラソン」や「耐寒高野山登山」、「競歩大会」などがあった。今では考えられないほど厳しいもので、「高野山耐寒遠足」の際にはモー

ター焼けで電車が立ち往生したが、電車を降りて約一里の道を無理やり進み、遠足を無事終えた、という記録も残っている¹⁰。

また、他校に先駆けて科学的な教育も行っており、顕微鏡を使った実験や天体望遠鏡を使った授業などを行っている。

このように和高女では単に良妻賢母のための教育だけでなく、能力主義・業績主義的なある意味男性像に結び付くような教育も行われていた。

野球部の発足

大正 10 年と大正 11 年に和歌山中学校が全国中等学校優勝野球大会で連続優勝を果たしたことで和歌山県内の野球熱が過熱し、和高女にも校長肝いりの女子野球部が誕生した。続いて同年に粉河、橋本の両高等女学校にも野球部ができた。和歌山県教育史によると全国で最初の結成であったそ



和高女野球部優勝記念写真（和中・桐蔭同窓会提供）

『和歌山県教育史』p.494 より

うだ。¹¹和高女は大正 13 年 6 月に開催された「第一回 日本女子オリンピック大会」で優勝を果たしている。この時学校も地元也大いに盛り上がったとのことである¹²。

当時、女子スポーツがブームとなり全国で多くの女学生がスポーツを始めた時代であったが、和歌山は大阪と近いという条件もあったのか、女子スポーツについては先進的な地域であったようだ。当時の女子アスリートの中では群を抜いた存在であった、わが国オリンピック女子メダリスト第一号の人見絹枝に土をつけた天才スプリンター、日方高等女学校の橋本静子、そしてわが国オリンピック女子金メダル第一号の前畑秀子を輩出する地域なのである。

しかし、この野球部については、文部省からのこじつけとも言える横やりが入る。文部省は野球や射撃は女子がするべきではないと主張し、翌々年には和歌山県学務課から野球は女子に不適切、不妊の恐れありとして中止命令が出され、結果女子野球部は解散となった。

この時代に野球は男子、テニスは女子、などのスポーツのジェンダー秩序が生まれ、その風潮が日本人に根付いてしまっていることは、現代の高校の部活動を見ても明らかである。女子があらゆるスポーツをすることが当たり前になった現在でも、なお大正・昭和初期に始まった秩序が隠然と日本人に根付いているというのはなかなか興味深い。

県下女子中等学校音楽大会

昭和3年1月、和歌山市内の女子中等学校（和高女、市立高女、私立高女、女子師範学校）によって「和歌山県中等学校音楽大会」が和高女の講堂で開催された。運動と比較して遅れをとっていた情操教育の一環として開始された催しであるが、やがて県民にとっては毎年恒例の盛大な催しとなり、和高女の講堂は地域の人々に西洋音楽を提供する場となっていった。



大阪朝日新聞 和歌山版 (S10.2.19)

音楽大会についての記事に半面割いている。最初は和高女の講堂で始まった大会だったが、このころには複数の会場に分かれて開催するほど大規模なものになっている。

有吉佐和子の入学

有吉佐和子は郷土・和歌山をテーマに名作を残した作家である。親の仕事上和歌山にいた期間は少ないが、昭和 20 年に和歌山に疎開した際に和高女に通った。この時の体験がのちの作品に大きく影響を与えている。和歌山を舞台とした作品としては『紀ノ川』『有田川』『日高川』の三部作や『花岡青洲の妻』などがある。環境問題を取り扱った『複合汚染』や人種差別を取り扱った『非色』など、現代においても未解決の問題にいち早く気づき取り扱っている。¹³



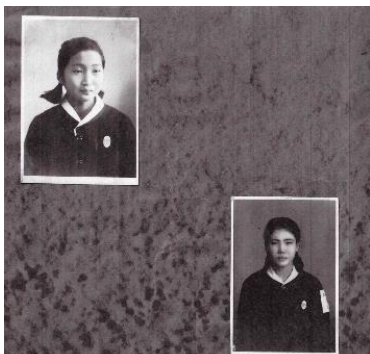
Wikipedia より



ブクログより

戦時中の和高女

昭和 19 年 1 月 8 日に緊急学徒動員方策要綱、3 月 7 日に決戦非常措置要綱が閣議決定され、和高女の生徒たちも明石に女子挺身隊として学徒動員された。(卒業生 D さんへのインタビューによると、学徒動員されたのは上級生であったそうだと。) 明石工場での過酷な労働に加え食事は雑穀類の多く入った主食と粗末な副食で、卒業生 B さんの遺族にインタビューした際「食べ物はずかしくて醤油のようなものをかけて食べた」と母が言っていた」とおっしゃっていた。



戦時中の学生服
標準服になった後の写真か。(卒業生Bさん遺族所有のアルバムより)

昭和20年7月9日、和歌山大空襲により和高女の校舎は全焼した。この時に親友や身近な方を失くした方も多くおり、卒業生の方へのアンケートでは学生時代の印象的な思い出として語られていた。校舎が焼けたあとは和師範付属小、旧和工校舎、旧二十四部隊兵舎と転々としながら学び続けた。¹⁴ 当時を体験した卒業生Jさんは「焼け跡を整理しながらもベンチを机代わりとして勉学に励んだ」と語られる。遊

びや流行とは縁のない学生生活だったという。

昭和天皇の行幸

昭和22年、昭和天皇が和歌山に行幸した際に、和高女にも立ち寄られた。行幸を記念して生徒が「復興の歌」を作詞した。「浜木綿かおる水無月の行幸の光栄を身に享けて、いま復興の喜びはわが学舎に溢れたり」¹⁵



昭和天皇を迎える和高女生（『和歌山市制施行120周年記念写真集 保存版 ふるさと和歌山市』p34）

学制改革

戦後、軍政府教育部長、ロバート・B・テキスターが和歌山の学制改革

を行った。学制改革により男女共学化され、新制高校 G 校（この名称については次章で述べる）へ和歌山中学校、県立和歌山高等女学校、市立和歌山高等女学校の学籍簿が引き継がれた。しかしテキスターの教育理念は「因習の打破、教育の機会均等」であり、特定有名校のエリート教育を排除、新制高校の平均化をはかるために小学区制を導入し、インタビューによると和高女生たちも附設中学校卒業という扱いになった後、それぞれの学区の高校へ散り散りに振り分けられていったという。

そのため、新生 G 校（現和歌山県立桐蔭高校）は和中、和高女、市立高女が元としながらも、創立当初は旧和中ばかりではなく、学区内の元海中、和高女、市立高女、文教高女など、様々な学校からの生徒で構成されていた。卒業生 J さんはアンケートに「お互い別の学校に通わされることとなったことは私たちにとって不本意であり桐蔭にいけることとなった私は幸せでしたが他校に配された友達の悲しみは大変なことでした」と回答されていた。

第二章 共学化後、なぜ和高女の歴史は抹消されてしまったのか

第一章で和高女の歴史について見てきた。その結果、県内で伝統的な女学校であることが見て取れた。それでは、なぜ戦後和高女の歴史は全く伝わらなくなったのか。対日占領における地方軍政の特徴、初期桐蔭卒業生へのインタビュー、共学化当時の状況の分析などの観点から分析していく。

他県の高校の歴史がどう伝わっているかについて知り合いの母校について尋ねるという方法で少しだけ調査してみたところ、旧制高校時代の歴史が伝わっているところとほとんど伝わっていない所で分かれたが、伝わっているところでは男子校女子校双方の歴史が年表にされていた。また〇〇西校は高等女学校の伝統を引き継ぎ、〇〇東校は旧制中学校の歴史を引き継ぐなど分担させて伝統を引き継いでいるケースも見られた。しかし桐蔭高校のように女学校と男子校の学籍簿を引き継いでいるのに男子校の歴史だけが残っているというケースはほとんど見られない印象だった。とはいえデータの母数が少ないので報告だけにとどめる。

ロバート・B・テキスターの教育改革

先行研究では、土田は和歌山市の旧制中等学校の歴史の中で高等女学校のみが消滅した理由としてジェンダー・アンバランスを挙げ、しかし「新制高校発足時の資料にも、家政系科目を強要されることへの不満の声はあっても、高等女学校の伝統・文化が引き継がれないことを非難する声はみあたらなかった。これらのことから、高等女学校が旧制中学校に吸収されたことは、『残念ではあるが、不名誉なことではない』と捉えられえていたと解釈することが出来る。」¹⁶と論じている。

この土田の論は、そもそも新制桐蔭高校に進学した当時の元和高女生が「和高女が旧制和歌山中学校に吸収された」と思っていることが前提になるが、果たしてそうなのだろうか。桐蔭高校は開校当時、どちらかという和高女の後継校として報道されていた。昭和23年5月8日の和歌山新聞には「舊和高女は“桐蔭”」という見出しが出ていた。これは桐蔭高校は開校当時、和高女焼失後和高女生が利用していた旧二十四部隊の兵舎で授業が行われていたからだと考えられる。このことから和和高女が単純に和中に吸収されたと考えられていたとは考えづらい。

共学化した昭和23年当時、日本はアメリカ軍に占領され、教育においても地方軍政が敷かれていた。文部省は昭和22年に教育基本法を制定し、第5条で男女共学について「男女は、互いに敬重し、協力し合わなければならないものであつて、教育上男女の共学は、認められなければならない。」と規定し、本条の趣旨について次のように説明している。『「教育上男女の共学は、認められなければならない」とは、1 法律において男女共学の真価を認め、男女共学を推奨すること、2 男女共学を国及びその機関が禁止しないこと、3 同時に、男女共学を強制するものではないこと、とされている。』¹⁷

「推奨」、「禁止しない」「強制するものではない」とずいぶんあいまいな文言である。教育の方針は地方に任せるとというのが国の判断であったことが読み取れる。このこともあり、戦後の教育は地方によってずいぶんと異

なっていた。

戦後の教育においても一つ重要な存在が、対日占領における地方軍政を取り仕切った、アメリカからの地方軍政部である。阿部によれば、「地方軍政部教育官の日本側地方教育関係者への働きかけのパターンは、概して、漸進的対応型と急進的対応型とに類型化することができる」とされ、「後者の教育官は、教育政策こそ日本が民主国家、文化国家として再生する礎であり、幾多の困難があっても最優先課題として早急かつ徹底して取り組むべきであるとの一途な信念に基き、その実施を実に厳格に指導する傾向にあ」り、「民間人出身の軍政要員、就中米本土で軍政官としての本格的訓練を受けた者の中には、単に上部軍政組織からの指令を伝達監視するに止らず、その趣旨に即してより積極的な施策の展開を期し日本の自立復興に寄与しようとの熱心に意気込みを以て指導にあ」¹⁸たったとされる。

和歌山県教育官であるロバート・B・テキスターは「地方軍政部教育官 (Educational Officer) 一覧 (1948)」によると、軍籍もなく教職歴もない民間人出身の教育官であることが分かる。つまり彼は上の文章にあてはまる急進的対応型で、彼の方針により和歌山県では、教育基本法に記されている三原則「小学区制」「総合制」「男女共学制」が他県よりも厳格に定められることになり、特定有名校のエリート教育を排除、新制高校の平均化を図りつつ、義務制となった新制中学を最重要視する政策が行われたのだ。土地の名前を一校が独占することは有名校の復活につながるとして新制高校の名前はすべてアルファベットで仮称するという徹底ぶりであった。

桐蔭高校も例外でなく開校当初は G 高校とされ、また学区制により旧和中、海草中、和高女、市立高女、文教高女などその学区に住んでいる者をごちゃまぜにしての開校であった。そのため当時桐蔭高校へ編入した和高女生である卒業生 D さんへのインタビューによると「学区ごとの男女混合な学校で和高女どころかそもそも和中の後継校という意識すらなかった。」と語っておられた。また、和中と和高女は県内トップの学校であったがその性質を引き継いでいること言うそうではなく、「むしろ最初は地区的に星林の方が進学率は高かった。」とおっしゃっていた。学区的に星林のほう

が富裕層が多く、進学希望の人が多かったからだそうだ。

また、現在桐蔭高校が和中の歴史だけを引き継いでいることに対してどう思うか尋ねたところ、そもそも桐蔭が和中の歴史を引き継いでいることを知らない風な反応が多かった。和高女は学校だけでなく学年ごとにふみの会、さつきの会など名前がついた同窓会が開催されるなど同窓生の間での結束は強かったが、昔を懐かしむだけで桐蔭と結びつけるということではなかったようだ。

これらのことから和高女の学生たちには和中に吸収された、という意識はなく、戦後の改革により全く新しい学校になったと考えられていたことが分かる。テキスターの徹底した教育改革が成功しているのではないか。

そしてテキスターの政策が効果を発揮しているのであれば新制高校は旧制中学校とはまた別のものであるという考えは、和高女に限らず和歌山県内の学校においてはほぼすべて共通しているのではないだろうか。実際、和歌山県内の公立高校の沿革を各高校のホームページで調査したところ、戦前の前身校について詳細に記述している高校はほとんどなかった。また、高等女学校と旧制中学校の歴史を引き継いでいる他のいくつかの高校も旧制中学校と高等女学校の歴史を同じ一つの年表にまとめているケースが多くどちらか一方だけをピックアップしているというケースもあまりない。

つまり戦前の学校の伝統を徹底的に排除するというテキスターの政策はある程度効を奏していると言える。

だが、桐蔭高校は現在、旧制和歌山中学を自らのルーツとしていることもまた事実である。桐蔭高校のホームページを見てみると和・桐蔭の歴史が明治編から綴られており和・桐蔭だけで A4 用紙で 20 ページにも及ぶ分量が綴られている。それだけの量の和・桐蔭の歴史を掘り起こして桐蔭の歴史として書かれる必要がどこかの時点であったことは確かなのだ。

私が考えたいのは、この時なぜ、学籍簿を引き継いでいる県立和歌山高等女学校、市立和歌山高等女学校の歴史が書かれなかったのか、である。ただし、これを土田の言うように「ジェンダーの問題」とするなら、和歌山の桐蔭高校以外的高校が詳細でないとはいえ、高等女学校の歴史を併記

していることが説明がつかない。ここでは「ジェンダーの問題」以外に注目して、和高女の歴史が残っていない理由についての仮説を述べていく。

校舎と和中のかかわり

『男女共学の成立』の中で土田は和中の校舎は残存し、和高女の校舎は消失してしまったことが大きいと述べている¹⁹。確かに、前身校と校舎の関連性は強いと思われる。

和歌山中学校の校舎は戦火による消失を免れていたが、新制中学校優先のテキスターの政策により新校舎が完成するまで城東中学校に貸与することが決定した。桐蔭高校が一時利用していた旧二十四部隊兵舎は学校の校舎ではないのだから、中学校の新校舎完成に伴って学校の校舎に戻るのは当然だろう。よって旧和歌山中学校校舎は譲渡ではなく、一時貸与という形であったと考えられる。実際この時期の和歌山新聞を読むと新制中学校の校舎不足がよく報道されており、いろいろな場所を借りている。

学校建設は自分達で
紀伊中學の生徒が猛運動

六・三・三制で新制中学校が開校されて一年餘りにもなるが盛と盛の結果「古紙を集めて下各町村は「金」と「物」になやまされ陛下二百の新制中校立校舎をもつてゐるのはほんのわずかでかぞえる程しかなく、これが打開策の一助にと策では「組合立中學」の設立を呼びかけてゐるものゝすでに組合立中學として帝足の廣草郎が伊中學校では預立の校舎とてなく借家で住いて大騒ぎ、そこで同校生徒自治的ではこのほど「組合立校舎」として「組合立校舎」の建設促進に邁進してゐる

を一日でも早く建て、新しい校舎にしよう」と案議一決、村民有志に呼びかけて三百五十萬の古紙を集め、賣上金三万五千円を得たので「校舎建設の部」にして下さい」とこのほど校舎建設の部で廣草郎の那須校長の手許にさし出したので校長さん、先生も大喜び同校自治會ではこれに力をよくしてスクラム組んで「組合立校舎」の建設促進に邁進してゐる

校舎が足りないが予算も足りないため、寄付を募ったり古紙収集をしてお金を集めて建設資金にしようと活動する中学生たちの記事。当時の校舎不足の深刻さがよく分かる。
和歌山新聞(S23.5.18)

和歌山市内の他の公立高校を見てみると、向陽高校は旧制海草中学校の校舎を利用、工業高校（光風高校）は旧県立和歌山工業学校の校舎を利用したのちそれを新制中学校に譲渡し旧県立西浜工業学校（光風高校西校舎）に合併している²⁰。

これら二校は旧制の学校の校舎が残っており、関連深く、ある意味しか

るべきところで新制高校をスタートしているのに、桐蔭高校は前身校の一つである旧和中の校舎が残っているにもかかわらず別の場所でスタートしているのだ。この後城東中学校新校舎の完成に合わせて旧二十四部隊兵舎から旧和中校舎へと移転したわけだが、それだけに余計和中 OB にとっては印象深かったであろう。また、城東中学校新校舎完成に合わせて一旦廃校になっていた和歌山県立和歌山商業高校が旧和中校舎を利用する計画もあり、スムーズに旧和中校舎に戻れたわけではなかったので余計に「校舎を取り戻した」という意識が強くあったのだろう²¹。

ところで、『高校風土記』によると、桐蔭高校は県下で最も改築の遅れた高校であったという。「和中以来の木造校舎は、老朽化し、ハトのフンを気にしながら授業したこともあった。」²²また、昭和 23 年 5 月 18 日の和歌山新聞には「荒らされたこの校舎 城東中學のなげき」という見出しで「窓ガラスはもちろん窓ワクさえない教室が多く冬までには何とかしなければと焦っている」と旧和中校舎の荒れ果てた様子が描写されている。最初は高校に使用されるはずだった旧和中校舎が急に新制中学に譲渡されることが決定し、その話が決まるまでの間、管理責任者がはっきりしなかったためと新聞には書かれているが、その実態は旧和中生がはらいせに校舎を出ていく前に窓ガラスをけ破っていったのだと記念誌の手記には書かれていた²³。

その三年後桐蔭高校は旧和中の校舎に戻ってくるわけであるが、老朽化と（卒業生により）荒らされた校舎での授業ということとなった。校舎の老朽化に加え生徒数の急増。もちろん旧和中校舎の整備は和中 OB の悲願ではあっただろう。しかしそれに加え、当時桐蔭高校に通っていた生徒の悲願でもあったのだ。実は共学化当時は、桐蔭に集まった生徒は、元の学校は関係なくその学区に住む生徒が集められた状態であった。つまりはバラバラの寄り合い所帯であった。

こうした状況で、桐蔭 PTA は他の高校が次々と挫折する中、二倍以上の寄付金を呼びかけ新校舎、図書館設置を見事達成した。これは当時の寄り合い所帯の学生たちを沸かせ、そこに新たな「桐蔭生」としての誇りと

団結を形成するには十分な出来事であっただろう。この時、その校舎をかつて使用していた和中の歴史が特に語られることになったことは不思議ではない。もともと和中の建物であった図書館をリフォームしたり和中心時代の門が残っていたりする現代においても建物の説明を受ける際に和中の歴史に触れる仕組みになっているのだ。

野球部の活躍と和中の歴史の継承

さらに、野球部の活躍が新生桐蔭高校の団結の原動力として捉えられてのではないかと考えられる。「桐蔭生」として団結し、「桐蔭生」としての誇りを形成する上で用いられたもう一つのシンボルと言えるのが、野球である。旧制和歌山中学校は全国的に名を知られた野球校であった。そのため和中心 OB からの支援や注目度は他の部活動よりも大きかった。

桐蔭高校には海草中の主力選手があつまり、向陽に割り当てられた海草中の主力選手も桐蔭学区の家の養子になるなどして桐蔭に強い選手が集まっていた。和中心の OB の後援のもと、桐蔭としての初大会で全国準優勝を果たす。『高校風土記』には昭和 23 年夏の甲子園準優勝を受けて「『あれが和中心の後身か』と、全国に響きわたった。寄り合い世帯でぎくしゃくしていた学園の、潤かつ油にもなったのである。」²⁴と書いてあり、野球も「桐蔭生」として団結し、誇りを持つ上で重要な原動力だったということが読み取れる。このように、校舎の新築、野球部の活躍は、共学化当時の寄り合い所帯だった桐蔭生にとって、団結するための象徴的な出来事であったのである。

しかし時代を経るにつれ共学の状態があたりまえという認識に移り変わっていく。これにより、「団結」のシンボルであった校舎や野球部に対する認識は変化してゆく。私の在校時においても硬式野球部は大変優遇されていたが、私にはそれがなぜなのかわからなかった。PTA の会長が自動的に野球部の後援部長になったり、同窓会から応援費を回収したり、他の部活生は帰らなければいけない時間帯の練習が許可されていたり、甲子園予選では吹奏楽部、応援団を伴っての試合など様々な特権が認められている。

他の部活で全国大会や世界大会に出ている部活もある中、めったに全国大会に出場しない野球部がなぜここまで優遇されるのか、我々生徒の中では判然としない伝統の一つであったが、かつて新制高校誕生時にはそれは重要な桐蔭のアイデンティティであったのだ。和歌山中学校の野球部の栄光の歴史がそのアイデンティティを支えていたということになるのである。

そしてそれはもはや野球部が団結のシンボルにならない時代にもそれは残る続ける。桐蔭生にとってやけに強調される和中の歴史や野球部の優遇といった「なぜなのかよくわからないこと」が「桐蔭生としての団結」という本来の目的が消え去ったからだ、と考えると納得がいく気がするのだ。

このようにして「和中の伝統を引き継ぐ」という要素だけが現代に残ったのではないだろうか。その裏側で、顧みられなかったのが和高女の歴史なのである。

和高女生自身による歴史の切斷

最後に、自分自身の現在の体験から、当時の和高女生たちの気持ちを推し量ってみたいと思う。調査を進めていく中で、「桐蔭の歴史の中に和高女生の歴史が引き継がれていないのは悲しい事」と思い込んで調査していたが、それを見直す必要があることに気づいた。インタビュー調査の際、卒業生 E さんが「和高女と和中合併の話が出た時、和高女の卒業生の多数が反対したために合併ではなく廃止という形で収まった」という話をされていた。どういう経緯でそういう話があったかは定かではないものの、和高女卒業生の中で和中との合併を望まなかったものも多少いたのは事実なのであろう。和高女としての伝統を大切にする＝和高女の歴史が後世に伝わるのが幸せだと思い込んで調査していたためにわかに信じがたいと思った。しかし、私達奈良女子大学の学生も似たようなケースに直面しているのである。

2022 年春、奈良女子大学が奈良教育大学と法人統合する際に奈良女生の Twitter がかなり荒れた。名前はそのままだけの統合だと説明を受けても強い抵抗感があったのを実際に私達も経験しているのだ。それは

なぜだったのか。歴史・伝統はそのまま残るとしても合併した先は別の学校だからではないだろうか。「奈良女子大学」という場所を目指して受験勉強を頑張ったし、奈良女生としての誇りを持っていたのに属するのは別のもの、という違和感がやはり私達の中にもあったのである。

これと似た状況が当時の旧和高女生達の間にもあったのではないか。しかも正真正銘の合併である。旧和高女生達は自分たちの伝統や誇りを持っていたからこそ学区制で寄り合い世帯となった和高女とは全く異なる桐蔭高校に自分たちの歴史を残そうという気にはなれなかった、ということも和高女の歴史が残らなかった理由の一つなのではないかと感じている。

おわりに

第一章では和歌山高等女学校の歴史をたどり、第二章ではなぜ和歌山中学校の歴史は残り、和歌山高等女学校の歴史が現代に伝わっていないのかについて見てきた。その結果、和歌山中学校の歴史伝統が学区制によりばらばらの寄り合い世帯であった桐蔭生達の団結のきっかけであり、のちのちには桐蔭生としての誇りを形成する上での手段だったからだということが分かった。戦後の荒れ果てた校舎を復旧する段階では、旧和中の象徴であった校舎や野球部の復活は桐蔭生全体の意気を盛り上げたであろう。

現代においての「高校の歴史」とは終戦直後のそれとはまたちがった意味合いをもつ。

桐蔭生は自分が桐蔭生であることにやけに誇りを持っている。これは和中生が和中生であることを誇りに思っていた伝統を受け継いでいるように思う。いっぽうでインタビューやアンケート、手記を通じて見た和高女生達もほとんどが和高女生であることに誇りを持っていた。つまり、桐蔭生が桐蔭生であることを誇りに思うのは和高女の伝統でもあるのだ。

戦争から 70 年以上経ち、現代において学校の歴史を生徒たちに受け継ぐことにどのような意味合いがあるのだろうか。そもそも戦前の前身校の歴史を受け継いでいる学校自体少ない。また、歴史を受け継いでいる高校の中でもそもそも自分の学校の歴史に興味を持つものなどごく少数なのが

現実である。私はそのごく少数のうちの一人の女子である。桐蔭生であることが誇りであったし、和中の伝統も誇りに思った。しかし和中が男子校であったと知った時、自分が桐蔭の長い歴史の中からはじかれた存在であるような気がしたのだ。和高女について調べていくうちに、和高女もまた伝統をもち、誇りを持っていたと知った。そして自分もその伝統を引き継ぐ立場にいられることを誇りに感じた。

今後高校の歴史を残すとしたら自分の学校の歴史に興味をもつ「ごく少数」の人たちのためであろう。それならばきちんと女子の歴史も伝えたい。

今回の調査において、現代に残っている高校の特色は終戦直後に生まれた風習が意外と多いのだということに気づいた。これは桐蔭高校以外の学校においても言えることであろう。戦後 70 年経過して世の中の状況は大きく変わっているのに、その時代の風習がそのまま残っているのである。それがいいのか悪いのかは別として、本当に今必要なものなのかどうかを改めて見直す段階に来ているのではないだろうか。

今後の課題としては、今回ピックアップしたのは県立和歌山高等女学校の歴史だけであるが、桐蔭は市立和歌山高等女学校の学籍簿も引き継いでいる。よって今後は市立和高女の歴史についても調べていきたい。

この調査を進めるにあたって和高女の卒業生の皆さんやご子息の方々、和高女生と関係が深い方々などたくさんの方に温かく協力していただいた。実際にお会いしたり、肉筆の文章をいただくことで、和高女生であることへの誇りを身近に感じる事が出来た。また今回アンケートにに応じてくださった方は戦争の時代を生き抜いてきた方々がほとんどで、戦争の恐ろしさをたくさん教えていただいた。今回のテーマ以外のところでもさまざまなことを学ばせていただいた。この場を借りて感謝をお伝えしたい。

¹ 和歌山県立図書館所蔵 県立和歌山高等女学校同窓会誌『いしずゑ』、和歌山県立和歌山高等女学校同窓会『桜映会々員名簿』（1965 年出版

か？)、和歌山県教育史編纂委員会編集『和歌山県教育史』2007、株式会社和歌山印刷所

² 土田陽子『公立高等女学校に見るジェンダー秩序と階層構造』2014、ミネルヴァ書房、p.19

³ 桐蔭高校ホームページ「和中・桐蔭の歴史（明治編）」

⁴ 前掲『和歌山県教育史』p.380

⁵ 土田前掲書 p.91

⁶ 難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』2012、創元社、p.143

⁷ 難波前掲書 p.169

⁸ 難波前掲書 p.110

⁹ 「和歌山県立和歌山高等女学校[45 回生…S20 年卒]の歴史」（1995）より
1995 年に開催された同窓会で配布されたとみられる個人作成のプリントより

¹⁰ 同前 p.74

¹¹ 『和歌山県教育史』p.494

¹² 土田前掲書、pp.63-65

¹³ 和歌山県ふるさとアーカイブより「紀の国の先人たち」

<https://wave.pref.wakayama.lg.jp/bunka-archive/senjin/ariyoshi.html>

¹⁴ 毎日新聞和歌山支局編集・発行『高校風土記 和歌山中～桐蔭高』1978、p.119

¹⁵ 写真、歌共に寺西貞弘ほか『和歌山市制施行 120 周年記念写真集 保存版 ふるさと和歌山市』2009、郷土出版社、p.34

¹⁶ 土田陽子「高等女学校の後継校が存在しない地域の男女共学」小山静子ほか編『男女共学の成立』六花出版、2021、p.251

¹⁷ 文部科学省サイトより

¹⁸ 阿部彰「対日占領における地方軍政—地方軍政部教育担当課の活動を

中心として一」『教育研究』49巻2号、1982、p.11

¹⁹ 小山前掲書内土田論文 p.237

²⁰ 小山前掲書内土田論文 p.237

²¹ 前掲『高校風土記』p.127

²² 前掲『高校風土記』p.143

²³ 和中開校百年桐蔭三十周年記念誌編集委員会編『和中開校百年桐蔭三十周年 記念誌』1978、p.158

²⁴ 前掲『高校風土記』p.125